



東京  
ゼリーフィッシュ



柴田斗真

東京で単身赴任をはじめて三年になる。

江東区にマンションを借りて錦糸町の事務所に通った。運動がてらの徒歩通勤。隅田川の支流・大横川沿いには遊歩道が整備されていて、正面に東京スカイツリーを眺めながら四〇分ほど歩く。満開の桜や、小枝でさえずる野鳥、散歩する犬などに癒される以外は、おおむね憂鬱な道すがらだ。

この四月に上司がかわってからというもの、職場は一変した。新任の部長は、細部にこだわる人で、販売見込みは千円単位、前月の提出見込みから一万円狂っても原因を追求される。会議では言葉の使い方にうるさく、「すこしでも」とか「もっと」とか「頑張ります」などの曖昧なワードは厳禁。常に数字に置き換えろ、が口癖だった。会議ともなると事前に準備する資料は最低でも二十ページは必要で、数字の矛盾点やコメントの良否を徹底的につっこまれる。酒の席では、ぶん殴ってやる、といきまく連中がひとりやふたりではない。二か月あまりで、二人が辞め、一人が休職となった。数字は伸ばすが、犠牲をともなう典型的な鬼軍曹。優秀な人材ではあるが、まわりはたまらないというのが本音だった。

その日は、月一回の営業会議をひかえて重たい気分を抱えて歩いていた。数字は目標に届きそうもない。対策も今のままでは相当つっこまれる。かといって、できないといえど何をいわれるかわからない。できそうもない目標をお約束の対策で糊塗する資料づくりは骨がおれる。苦痛の一日を想像するとため息がもれた。

ふと川面に目をやると白い物体が浮いている。水母だった。よくみると、そこかしこに半透明のカサが揺蕩っている。都会の真ん中を流れる川に水母がいるのが不思議だった。たしかにこのあたりは、その昔、水運でにぎわっていて、一時間もあるけば海にでるのだ。水母は悠揚とした動きにみとれながら橋のうえまできておどろいた。眼下に水母が大量発生していたのだ。子供の手をひいたスーツ姿の男から夏をおもわせるような日差しがふりそそいでいた。

三十年前に亡くなった父親の顔がうかんだ。

父が東京に転勤になったのはちょうど今の僕ぐらいの歳ではなかったか。田舎から都会へでの独りぐらし。それから半年もたたぬうちに秋葉原のホームで倒れた。くも膜下出血によるあっけない死だった。

中学一年の夏。

めずらしく父親が僕の部屋をのぞいた。僕はヘッドフォンをはずして父を見た。

「おい、海でもいくか」やんわり断ったが、つよく誘うので、しぶしぶ腰をあげた。思いあたるふしがないでもない。

そのころの父は、毎日帰りが遅く、日曜日も出勤するようになっていた。僕が起きる前にでかけ、僕が眠ってから帰宅する。夕食も朝食も顔をあわさない生活がしばらく続いていた。母親に訊ねるとエイギョウになったからだという。実感としてはわからなかったが、エイギョウというのは大変な仕事なのはぼんやりと理解していた。その昔、鹿児島にいる叔父が生命保険の加入のお願いにきていた憶えがあったからだ。その果てしない遠さと、さして親しくもない父に、何度も頭をさげていた姿がここにひっかかっている。

僕は僕でやんちゃな仲間とつきあうようになっていた。先日、万引きで補導されたばかりだった。近所の電気屋やらカセットテープを盗んでクラスメートに売りさばっていたのだ。大窃盗集団だと校内で大問題になった。僕自身は、買い手だったのだが、盗品と知っていて買うのも同罪だということになった。母親からはこっぴどく怒られたが、父はあえてだろうか、なにも言わなかった。

たぶん、そのことでじっくりと話すつもりなのかもしれない。気は重かったが、あきらめて車のサイドシートにおさまった。「どこいくが？」と訊いたが、返ってきたのは隣県の知らない町の名前だった。貝を採りにいくのだという

途中で、父の友人の家に寄った。父が車からおりて、ヤブと呼んだ。手入れのいきとどいた庭木のあいだから、角刈りにサングラスの男が顔をだした。上半身は裸で、手にしたホースから水があふれていた。男は奥に引っ込み、シュノーケルと足ひれを手にしてでてきた。二人はしばし立ち話をした。門柱に大藪という表札がかかっている。やがて、父は車にのりこみエンジンをかけた。ヤブと呼ばれた男は、あとでおれも行っていいかのう、といて僕をちらっとみた。父がうなずく。男は、今から親戚行かんらんから昼ごろになるちゃ、といて再び僕をみた。僕はちょこっと頭をさげた。

父は無言でハンドルをにぎっている。窓の外はべた凧の海で、夏の日差しが照りかえして眩しかった。僕は、手持無沙汰になって、持ってきていたカセットテープをかける。「ルイジアナ・ママ」が流れた。父が、お前、そんな曲きくがなといった。僕のはロックバンドのアルバムに入っていたのだが、もともとはアメリカの曲でひと昔まえにも日本語のカバー曲が流行ったらしい。

「学校どうや。勉強しとるか」

「うん」

父は万引き事件にはふれず、気の抜けたような会話がつづいた。以前は父とどんな話しをしていたのかうまく思い出せない。

二人きりのドライブは一時間以上におよんだ。車は、こぢんまりとした港町をぬけて、松林のなかでとまった。木立のむこうに輝く海がみえる。僕たちは車の陰でさっと着替えて浜辺へでた。砂でなく、砂利と小石で覆われているので足裏が痛かった。人影はなく、左手が突堤になって

いて小さな灯台がみえた。

暑かった。陽は高く、空が靄ってみえる。

父が肩から提げていたクーラーボックスを足元におき、ビニールバッグから水中メガネとシュノーケル、足ひれをとりだして僕に渡す。父は、手には浮きのついたフラシをもって海へ入っていく。背中にしみが目立つようになっていた。僕も水に足をつける。浅瀬はぬるいが、だんだんひんやりとしてくる。父に呼ばれて胸の深さまですすんだ。海底も砂利がつづいていて、ところどころに大きな岩があった。

「ここから沖へは行くなよ。急に深なっとるからのう」

父は、みとれよ、といって顔を海に沈めた。僕も水中めがねをかけて海中をのぞきこむ。父の足ひれが激しく動き、水が濁った。石がはじけ、砂が舞い、それがおさまると水底にすり鉢状の穴がうがたれていた。砂地にはぎっしりと貝が埋まっている。父は潜って貝をつかんだ。両手の平に貝が山盛りになっていた。

「赤貝や。焼いても刺身にしてもうまいぞ」

殻には、放射状にのびる畦のような起伏がある。盛りあがった蝶番の部分は白く、縁にいくほど茶褐色に変色している。触れると固く口をとじ塩水を吐いた。父がフラシに貝をほうりこむ。フラシには、三つの浮きがついており、そこから垂れさがった青い網のなかに赤貝がしずんでいく。父は水中メガネの水を抜き、もう一度潜った。ふたたび両手にいっぱい赤貝があった。僕もやってみる。足ひれで砂利をかきだすと視界が暗くなり、やがて砂地があらわれた。あちこちに赤貝が顔をだしていた。すぐに砂に隠れようとする。僕は潜って砂からほじくりかえす。父のようにはいかなかったが、三個とれた。フラシの口に入れる。父もきて両手の赤貝を放した。すぐに顔を水につけて足ひれを動かす。濁りがおさまると赤貝が顔をだす。潜って貝を掘りだし、フラシに入れる。フラシの底がふくらんでいく。

場所によって当たりはずれがある。周りには魚があつまってきた。砂といっしょに餌が舞いあがるのかもしれない。恐れるふうもなく僕のそばに寄ってくる。手を伸ばすとさっと反転するが、またやってくる。小魚ばかりでなく、三十センチを超える黒鯛が目の前を泳いでいく。僕はすこしずつ場所を移動しながら赤貝を採っていった。夢中になっているうちにフラシがいっぱいになっていた。父がいれたのだろう、手の平サイズの大あさりも数匹混じっていた。父はフラシをもって海からあがり浜辺のクーラーボックスにうつしかえた。父の背中中は真っ赤に灼けていた。それにしても、砂中の赤貝の量にはおどろいた。人影がないところをみるといわゆる穴場というやつなのか。それとも地元ではどこにでもいてめずらしくもないのか。

真夏の太陽が中天で燃えたっている。

沖合を漁船が横切っていくと、海面がゆっくりと盛りあがり、その波が僕の腰のあたりとどいた。海面に目をやると足ひれがつきでている。瞬時にいれかわり、赤貝を手にした父が顔をだす。二人で、二度フラシをいっぱいにした。

「腹減ったか」

問われてうなづく。バスタオルで身体をふき、Tシャツをきて、バスタオルを腰に巻いた。車にもどって近くの大衆食堂へ行った。入口はあけっぱなしで、壁には文字の変色したメニューが

短冊状に貼られている。奥から腰のまがった爺さんがでてきてテーブルに水をおく。僕はカツ丼を、父はビールと炒飯を注文した。天井の片隅から扇風機が生ぬるい風を送っている。僕は電話台の下から油污れの目立つ漫画雑誌をもってきて読んだ。二週間前の号だった。腰に巻いたバスタオルに海水がしみてきて気持ち悪かった。父は瓶ビールをグラスに注いで飲みほした。上唇に泡がついた。ビールが半分になったころ、炒飯がはこばれてきた。続いて僕の前にカツ丼がおかれた。ふたから玉子がはみだしていた。肉厚のカツとだし汁のしみたころもがうまかった。

食事を終えて海へもどる。元の場所に着いたら白いバンがとまっていた。浜辺に人影がある。父が、ヤブ、と声をかけた。大藪さんがふりむいて白い歯をみせた。

「どうや、今日」

「大漁やわい」

父がクーラーボックスを開けると大藪さんはほおとって唇をすぼめた。波打ち際でおとなの会話がはじまった。僕はTシャツを脱いでそのまま海へ入っていく。二人の声が耳に届く。なにっという言葉が耳にひっかかった。

「ほんまかあ」

「まだナイジやけどのお」

「家族はどうするがい？」

「タンシンやちゃ」

「ふーん、だれか東京の事務所に行かんならんとはゆうとったけどのお。タドコロのジンジやな」

そこから先の内容はわからなくなった。が、タドコロという名前には憶えていた。以前、娘を連れて家に遊びにきたことがある。海に近い僕の家で荷物をおいて海水浴へ行ったのだ。父の会社の人がかかるからおとなしくしていろといわれていた。やたらと頭をさげる母親をみて、えらい人なのだろうとおもった。細身で眼鏡をかけ、頭がよさそうにみえた。娘は小学校高学年で、髪が長く、とても背が高かった。みんなが海へでかけたあと、お土産に渡されたメロンを台所で一人で食べた。

僕は三十分ほど貝を採って海からあがった。二人の話は続いていた。僕は浜辺を横切り、隣接した突堤にむかった。石がやけていてつま先でとびはねるように歩く。

漁船が数艘舳われているちいさな港だった。凧いでいた海は、午後になってさざ波だったが、港内は不気味なくらいしずかだった。水母が数匹浮いていた。先端に近づくにしがって、水母の数が増していく。途中から海の青がとつぜん濃くなった。かなり水深がありそうだった。先端にある灯台に近づくと紺碧の海が白く濁ってみえた。大量の水母だった。足をとめてその光景にみとれた。水母の群れが水底にむかってつづいている。深い海のあらゆる階層をゼリー状の物体が埋めている。さながら白い大渦巻だった。僕はそばにあった繫船柱に腰をおろした。水母の動きは、ゆったりとして、カサをしぼり、水をはきだすようにして小刻みにすすむ。水母が移動したスペースに別の水母がはいってきたりして、ひとつの生き物が動いているようにみえる。水母の海は、カンブリア紀からそこにあって、これからも永遠にありつづけるようにおもわれた。

日差しは強いが風がでてきていた。遠くの浜辺に父と大藪さんの姿が黒い影となっている。僕は真夏の底でひとり坐りつづけた。

父の転勤を知らされたのは、それから一週間後だった。

僕もおなじくらいの歳になり、偶然東京で暮らしている。あのときの辞令が栄転だったのか左遷だったのか、今でも知らない。